



重症子宮内胎児発育不全児における尿道下裂合併症例とその出生時臨床像の検討

藤岡, 一路 ; 森岡, 一郎 ; 松尾, 希世美 ; 横田, 知之 ; 森川, 悟 ; 三輪, 明弘 ; 柴田, 暁男 ; 横山, 直樹 ; 松尾, 雅文

(Citation)

日本未熟児新生児学会雑誌, 22(3):553-553

(Issue Date)

2010-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

利用に関する注意 : ご利用は著作権の範囲内に限られます。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001700>



58

重症子宮内胎児発育不全児における尿道下裂合併症例とその出生時臨床像の検討

神戸大学大学院 医学研究科 内科系講座
小児科学分野藤岡一路 森岡一郎 松尾希世美 横田知之 森川悟
三輪明弘 柴田暁男 横山直樹 松尾雅文

【背景】

妊娠中の胎盤機能不全は子宮内胎児発育不全を引き起こす。特に早期より起こった場合、重症子宮内胎児発育不全児 (severe IUGR 児) を呈しやすい。一方、妊娠早期の胎盤機能不全は胎盤由来 hCG 分泌不全の結果、児に尿道下裂を発症することが示唆されている。それゆえ、より発育不全の強い Severe IUGR 児に尿道下裂の合併が多いと考えられるが、Severe IUGR 児における尿道下裂の合併症例やその出生時臨床像に関する報告はない。

【目的】

Severe IUGR 児における尿道下裂の発症割合と出生時の臨床像を明らかにすること。

【対象・方法】

2004年1月から2009年9月までの期間に神戸大学医学部附属病院周産母子センターに入院した新生児のうち、出生時の身長又は体重が $-2SD$ 未満のSevere IUGRの男児61例を対象とし、尿道下裂の発症割合と出生時の臨床像について後方視的に検討した。

【結果】

Severe IUGR 児61例中9例(15%)に尿道下裂を認めた。尿道下裂合併群(H群:n=9)と尿道下裂非合併群(C群:n=52)に分け、その出生時臨床像を比較検討すると、在胎週数、出生体重・身長に有意差はなかった(H群:在胎週数 34.7 ± 3.9 週、出生体重 $1,459 \pm 627$ g、身長 38.5 ± 5.9 cm、C群:在胎週数 35.5 ± 4.4 週、出生体重 $1,663 \pm 636$ g、身長 39.7 ± 6.2 cm、 $p = n.s.$)。アプガースコア1分値3点以下の割合(H群:44.4%、C群:11.5%、 $P = 0.01$)とSevere IUGRの原因として胎盤臍帯異常を有する割合(H群:100%、C群:38.5%、 $P < 0.01$)がH群で有意に多かった。

【考察】

Severe IUGR 児が尿道下裂を発症する割合は15%で、我が国の一般男児の罹病率0.3%、出生体重が10%ile未満のIUGR 児の罹病率12%に比して高頻度であった。Severe IUGR 児のうち尿道下裂合併例では胎盤異常を呈する症例が多く、重症新生児仮死の頻度が高いことと関係があるかもしれない。